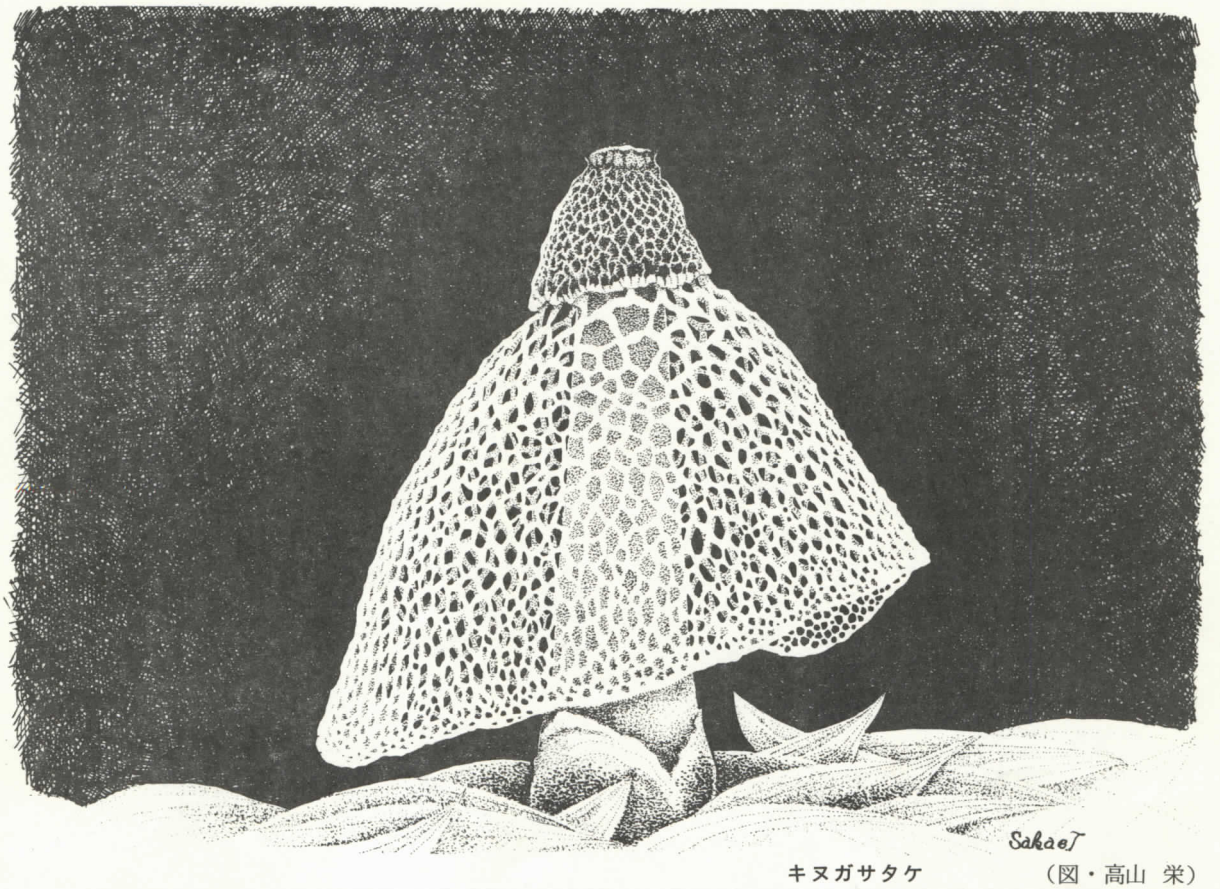
関西菌類談話会会報

1988年4月　No. 3



キヌガサタケ　（図・高山 栄）

Dictyophora indusiata (Pers.) Fisch.

キヌガサタケ（スッポンタケ科）

吉見　昭一

幼菌は径3～4（5）cm，球形または卵形で白色。こすると，しばしば淡赤紫色になる。底部には，太さ1～2㎜の長い根状菌糸束をつける。これは長く伸びて，竹の枯れ葉や枯れた地下茎などにまといつく。胞子が成熟すると，幼菌の皮がやぶれ，托（柄）が伸び，傘が顔をだす。ついで菌網（マント）が鐘状に拡がる。

托は太さ2～3cm，高さ15～18（23）cmの白色円筒状で中空，2～3層の泡状の組織よりなる。内側の「泡」ほど大きい。托の外面には多数の小孔がある。伸長速度は1分間に最高4㎜である*。

菌網は白色，長さ10～13（20）cm，多角形～楕円形（円形）の網目があり，繊細な組織よりなる。その下縁部は膜状になる。伸長速度は，1分間に最高5.5㎜*。菌網は托の上部に付着し，傘と托の間から下に展開する。

傘の表面には深くて細かい隆起網目があり，白色，時に淡黄白色。表面には，成熟すると粘液化する暗緑色の基本体が付着する。頂端には白い環孔を開く。基本体は粘液化すると強い悪臭を放ち，ハエ等の昆虫を呼び寄せる。

胞子は粘液中にあって無色，楕円形で3.5～4.5×1.5～2μmである。

年2回，梅雨期と秋期，竹林に群生～散生する。熱帯に多く分布し，日本では全土に産する。中国では食用に供される。

白色できわめて優雅な形は，まさに『きのこの女王』である。しかし，約5時間でしおれ，約半日で崩れる。美顰（びじん）薄命である。

日本では本種に似るマクキヌガサタケ *Dictyophora duplicata*（Bosc.）E. Fisch. が広葉樹林地に発生する。また，菌網と托，または菌網のみ黄色のウスキキヌガサタケ *D. indusiata* f. *lutea* Kobay. が西日本に発生する。熱帯地方には，菌網が紅色の種がある。

（＊ 著者の調査による）

ニュージーランド及びタスマニアのSecotiaceous Fungiについて

本　郷　次　雄

ハラタケ目に関連深い腹菌，Secotiaceous fungiはすでに前世紀から知られていたが，今世紀になって世界各地から興味ある種類がぞくぞくと発見され，ハラタケ目あるいは腹菌（亜綱）の系統，進化を解明する上にきわめて重要な資料となっている。これらの菌の分布の中心ともいうべき地域は，おおまかに言って世界に3個所ある。すなわち，ニュージーランド～オーストラリア東部のナンキョクブナ属（*Nothofagus*）の分布する地域，同様にナンキョクブナ属の分布する南米南部，及び北米の特に西部地域（主として針葉樹林帯）である。筆者は1987年4～5月にニュージーランド及びタスマニア（オーストラリア）で菌類調査する機会を得，これらの興味深い菌類をかなり採集することができたので，ここに主なものを紹介する。

Thaxterogaster：フウセンタケ属に近縁で，ニュージーランドから14種報告されている。オーストラリア，南北アメリカに分布。（図1，2）

Notholepiota：広義の*Lepiota*（カラカサタケ属）に近縁。ニュージーランドに1種のみ。

Weraroa：ニュージーランドに3種がある。モエギタケ科に近縁。（図3）

Macowanites：ベニタケ属にきわめて近い。北アメリカに9種，南アフリカ・ソ連モスクワ地方・ニュージーランドにそれぞれ1種がある。（図4）

Arcangeliella：チチタケ属に近縁で，傷つくと乳液を分泌する。タイ（1種），イタリー（1種），北アメリカ（2種）から報告されているが，筆者は今回タスマニアで本属と思われるもの1種を採集した。

Elasmomyces：ベニタケ科，特にベニタケ属に近く，乳液を欠く。*Macowanites*よりは一歩腹菌側に歩み寄った属である。イタリー，オーストラリア，北アメリカに分布。筆者はタスマニアで*E. hepaticus*と思われるものを採集している。（図5）

なお，日本からのSecotiaceous fungiの報告はスナタマゴタケ*Endoptychum agaricoides* 1種のみで，これはハラタケ属に近く，北海道石狩湾の海岸で採集されている。チチタケ属に類縁のある*Zelleromyces*も採集されているが，未報告である。

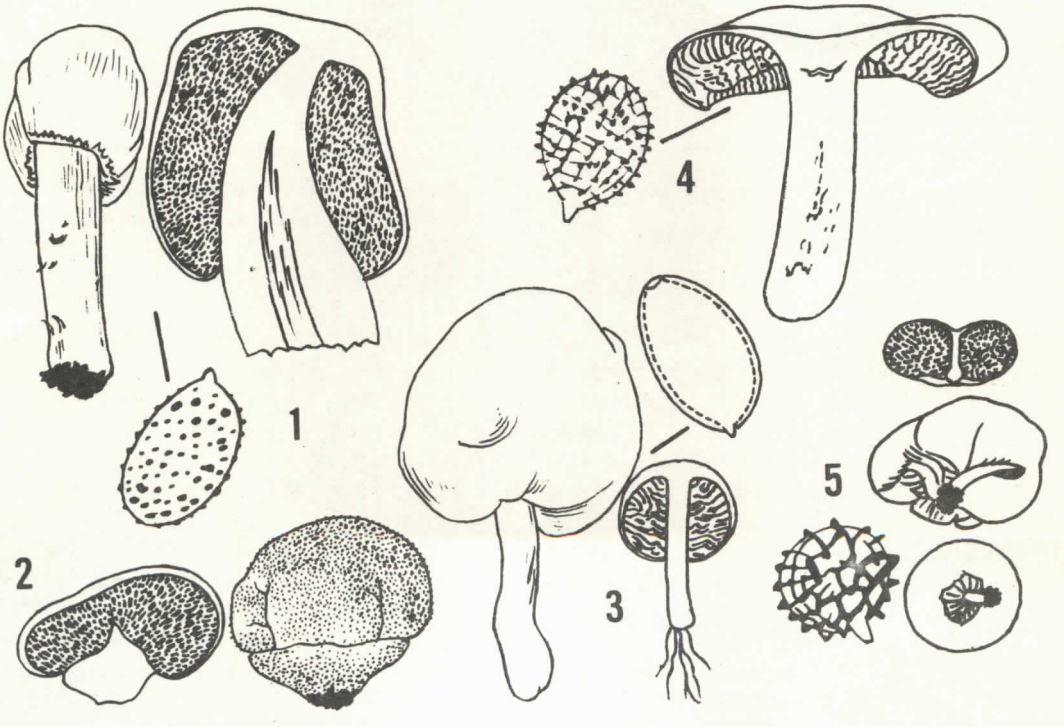


図1　*Thaxterogaster epiphaeum* Horak，　**2**　*T. cartilagineum*（Cunningham）Moser，
3　*Weraroa novae-zelandiae*（Cunnigham）Singer　**4**　*Macowanites carmineus* McNabb，
5　*Elasmomyces hepaticus* Beaton, Pegler & Young　（子実体 ×1，胞子 ×2000）

切手できのこ採集

大和谷　三　郎

ヤマドリタケ
（チェコスロバキア）

談話会から案内して頂く野外の採集会には，ほとんど参加していない私ですが，その穴埋めにも，と楽しんでいるのがきのこ切手の収集です。世界の国々から発行されて行く切手の中からきのこを図案としたものを見付けては，これらをアルバムに収納整理し，時々取り出して眺める醍醐味はまた格別です。

こころで，きのこが世界で初めて郵便切手の図案として現われたのは1958年です。この年にはルーマニアとチェコスロバキアとから，それぞれきのこの切手が発行されています。とくにチェコスロバキアのものは，図柄，色彩，印刷ともに素晴しく，印刷技術の進歩した現在でも，なおきのこ切手の代表として推薦したいものの一つです。図示したのはそのうちの一枚で，ヤマドリタケを描いた切手です。

その頃は，きのこ切手の発行も何年かに一回位の割合でしたので，集めるのも気楽なものでした。ところが，最近のきのこ切手の発行は頻度が高く，世界の各国から次々と発行されています。この有様ですと，余程注意していないと見逃してしまいそうです。ご参考までに，これまで発行されたきのこ切手の発行件数の推移を五年毎に区切って表にしてみました。

きのこ切手発行頻度の推移

切手発行時期	件数	枚数	話題の切手
1958～1962	4	32	ポーランドの三角切手
1963～1967	4	24	モンゴリアの大型切手
1968～1972	1	6	コンゴのシロアリタケ切手
1973～1977	7	31	ブータンの立体切手
1978～1982	15	72	スエーデンの切手帳
1983～1987	52	313	小型シート発行多数

表示のように，つい数年前までは世界中のきのこ切手を完集するのも，そんなに困難ではない枚数でした。それが1983年以降の五年間で，それまでの約二倍ものきのこ切手が発行されたのです。既に昨年までのきのこ切手の発行国数は70ケ国以上に亘っていて，発行された切手の種類も500種に達しそうです。それだけに，これからが楽しみだとも言えそうです。

ヨーロッパやアジアの国々から発行される切手に描かれたきのこは，日本でも見られるきのこが多いので種類の同定は容易です。ところが，アフリカを始めとする熱帯地方や南半球の国々から発行されるきのこ切手の中には，手元のきのこ図鑑では見られない珍しいきのこが描かれていて，所属の科名すら判らないものが増えてきました。切手できのこ採集を楽しむ私には，ただ描かれたきのこを眺めるだけで，それ以上に為す術を知らずの状態です。それにしてもきのこの種類は実に多種多様だと感嘆しています。

日本にも，1974年に桐生市で開催された第九回国際食用きのこ会議を記念して発行されたシイタケを描いた切手が一種あります。嘘か本当かは定かではありませんが，日本では昔から切手の図案にきのこを採用するのがタブーとなっていたそうです。理由はきのこが男性自身を象徴するものだからということでした。そんな日本でシイタケを図案にした切手が発行できたのは大した快挙と云うべきでしょう。図案がツボミのマツタケでなかったことが幸いしたのかも知れません。

ところで切手ではありませんが，全国の主要郵便局に備付けられている風景スタンプの中にもきのこを図案にしたものが，かなり存在しています。昨年末の調べでは，36の郵便局がきのこを図案に採り入れた風景スタンプを使用中でした。マツタケとシイタケを描いたものが丁度半分の18局ずつなのも面白いことです。近畿圏では京都府園部局，兵庫県相野局，兵庫県飾西局の三局がマツタケを図案にした風景スタンプを使用しています。このような風景スタンプでのきのこ採集も楽しいものです。これらの風景スタンプの中でも図示したのは私の一番好きな図案のスタンプです。誠に立派なマツタケが描かれているではありませんか。

同好の方がおられましたら是非ともご連絡頂きたいものです。

（石川県珠洲局）

きのこの色について

丸　本　龍　二

昨年の暮に「きのこの色素」という300ページ以上の本が届けられた。著者の一人であるボン大学のシュテグリッヒ教授が送ってくれたもので，きのこの色素を有機化学的に解説しているが，分類学的なことも多少触れている。この本をひもときながらこの分野の進歩もかなりのもので，将来はこのあたりの知識がきのこの分類に生かされるのではないかと思ったりした。

元来，きのこの色彩はわれわれを引付ける重大な要素であると共に，きのこの分類にとっても不可欠なものであるといえる。同じような色でも化学的に見ると全くちがう物質によることが多く，このちがいを理解し，うまく利用できれば，きのこの世界もグッと深みを増すにちがいない。大雑把に言えば，ベニタケ属は蝶の翅の色素と同系のプテリジン，チチタケ属の主として乳汁はアズレン系色素，テングタケ属やアカヤマタケ属は高等植物にも分布するベタライン系色素，フウセンタケ属はキノン系色素を含んでおり，色彩豊かなきのこを抱える代表的な各属はそれぞれ独自の色素で装っていることに驚かされる。

イグチ科については，この科に特有なプルビン酸誘導体を用いて同じ科の中での類縁関係を調べたり，他の科とイグチ科との関連を探ることが積極的に行われている。これに関しては既に日本菌学会ニュース6号において簡単な紹介をしたが，その後の進歩について付け加えてみたい。

キイロイグチ属の代表種キイロイグチ（*Pulveroboletus ravenelii*）は単一の色素ブルピン酸を含み，その含量は乾燥子実体重量の8％に達する。比較的簡単な化学構造を持つこの色素は地衣類には広く分布するにも拘らず，他のきのこからは発見されていなかった。最近になって *Boletus subglobosus* というきのこにもブルピン酸が沢山含まれることが分かり，両者が類縁関係にあるというシンガー氏の意見を支持する結果となった。同じ属のハナガサイグチ *P. auriflammeus* もブルピン酸にきわめて近い色素を持っているので，典型的なキイロイグチ属はブルピン酸にごく近縁な誘導体を含むものということになるかも知れない。最近，農林水産省林業試験場の根田仁氏らは木材腐朽性のキイロイグチ属の新種 *P. pseudolignicola*（ザイモクイグチ）を記載したが，そこで述べられている“乾燥子実体の傘表面の微粉”がどんな色素から成っているかに興味が持たれる。

更に腹菌類であるショウロタケ科やニセショウロ科とイグチ科との類縁関係も少しずつ明らかにされているので，今回はコツブタケ（*Pisolithus tinctorius*）の例を紹介したい。

このキノコは荒地にも耐え，多くの樹木と菌根をつくるので，土地改良に応用できるのではないかと期待されている。子実体の断面を見ると，御歯黒をした総入歯がチョコレートをかじった時のようで全く載けない。しかし，所変わればこのきのこも薬味に使われるというから面白い。その様子は，“未熟なきのこの表皮をむいてから肉を薄切りにし，乾燥させる。このひと切れをスープに入れると薬味が付き，汁が濃い茶色になる。もっともこの風味は議論のあるところで，多くの人はそれを好むが，ただ食物に色を付けるにすぎないと主張する人もいる”といった具合で，色付けが主要素であることが窺える。何と，このきのこの乾燥重量の25％は化学的に純粋なノルバディオンAというプルビン酸系の茶色色素で，既に *Xerocomus badius** の傘表皮から抽出されていたものと一致した。

きのこが料理を強く染める例としては，アカヤマドリ（*Leccinum extremiorientale*）があり，よい味の傘肉から黄色い煮汁が出るので，清水大典氏によれば，“カレーと組合わせた料理がよい”と指示されている。この黄色色素の解明は目下進行中で，ヤマイグチ属から新しいタイプの色素が得られるのではないかと期待される。

また，最近の詳細な研究によると，ツキヨタケ（*Lampteromyces japonicus*），*Omphalotus illudens*，さらに木材腐朽菌イドタケ（*Coniophora puteana*）にまでプルビン酸誘導体が認められており，これらのきのことイグチ科との類縁関係について一考を要しそうな気配である。

---

* 編集委員会注：日本で *X. badius*（ニセイロガワリ）と同定されていた種は疑問があるとのことである。

（熊本きのこ会　1985．イグチ類　本郷次雄博士キノコ講話要旨．日本菌学会ニュース　5：21－30）

スイスの森ときのこ (2)

村　上　康　明

前回はスイスの菌学事情をご紹介しましたが，今回からは具体的にスイスの森林と特徴的なきのこをご紹介しようと思います。

今まで採集に出かけたうちで一番印象に残っているのはポンドノン（Pont de Nant）です。ここはスイス南西部の山岳地の自然保護区内にあり，私の住んでいるヴォー州と急峻な山岳地帯をもつヴァレー州の境界に当たります（図1）。ポンドノンは標高1000ｍの

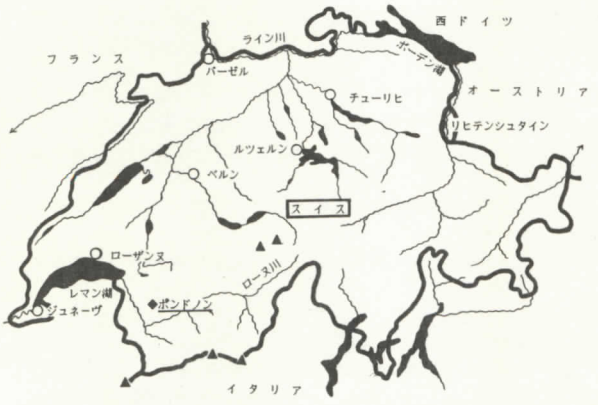


図1　スイスの略地図

地点に位置します。この一帯はヴォー州で一番標高の高い地域で，背後には3000ｍ級の山々が屏風のように立ちはだかっています（図2）。ここへは大学から車

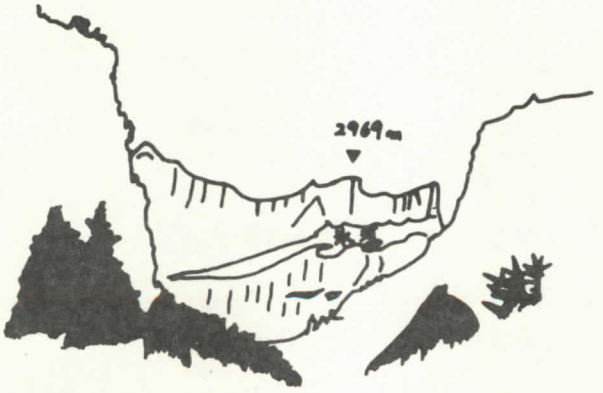


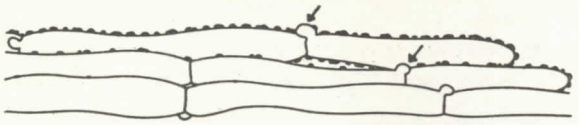
図2　ポンドノンから見た山々

で約1時間半かかり，レストランとローザンヌ大学付属植物園があります。植物園は宿泊施設が完備しています。

私は1986年の8月，モーゼル先生，クレマンソン先生と一緒に7泊8日の日程でここへ採集に来ました。モーゼル先生はオーストリアのインスブルック大学の教授で，フウセンタケ属を中心としてハラタケ目の分類で世界的に有名な方です。採集を行なった森林はトウヒの仲間を主体とした林で，ブナ*林やカラマツ*林も混在していました。少し高い所まで上がってハンノキ*の林にも行きました。また，林と林の間には草原や湿原が広がり，非常にバラエティに富んだきのこが見られました。ちょうどきのこシーズンで，所によっては足の踏み場もないほど出ており，8日間で私が採集したのは約60種でした。モーゼル先生がおられたおかげでフウセンタケ類に全部名前がつきましたが，このことは私にとって大きな驚きでした。印象に残った種類としては，*Hygrophorus intermedius*，*Tricholoma psammopus*（カラマツシメジ），*Porpoloma pes-caprae*，*Melanophyllum echinatum*（アカヒダカラカサダケ），*Entoloma incanum*，*Inocybe pyriodora*，*Cortinarius infractus*（ヤブレオオフウセンタケ），*C. odorifer*，*C. spilomeus*（アカゲフウセンタケ），*Gomphidius maculatus*（キオウギタケ），*Suillus sibiricus*，*S. tridentinus*，*Lactarius deterrimus*，*L. salmonicolor* などがあります。ちょっと専門的になりますが，このうちのいくつかについて説明します。*Porpoloma*（チチシマシメジ属）というのは耳慣れない属名だと思います。きのこの形はキシメジ属に似ているのですが，菌糸にクランプ**があること，胞子がアミロイド**であること，縁シスチジア**があること，という3つの特徴によって容易に区別できます。*Entoloma incanum* は茎が黄緑色で，傷つけると青緑に変色するという，小柄ながらとても美しいきのこです。日本の草原地帯でもこのきのこが見つかることを期待します。*Suillus tridentinus* は一見ハナイグチに似ていますが孔口がハナイグチよりも大きく，傘や孔口の色も赤みが強いです。ヤブレオオフウセンタケはオリーブ褐色系のきのこですが，肉に10%硝酸銀水溶液をつけるとすみやかに黒変するので簡単に見分けられます。

モーゼル先生はイッポンシメジ属などの小型きのこを多く採集しておられました。ヨーロッパでは大型きのこにはほとんど名前がついてしまっているのです。先生は数年前にもポンドノンへ来られ，山の上の方で明らかに新種と思われるフウセンタケの一種（?）を採集されたとのこと，再び採集できることを期待しておられましたが，降雪のため断念せざるを得ませんでした。8月に雪が積もるなんてさすがはスイスと感心しましたが，冬の上着を着てもまだ寒いのには参りました。ところが今冬は打って変わって異常暖冬，気温が0℃以下に下がりません。雪も11月以来積もらず，各地のスキー場が大弱りしています。

*, ** 編集委員会注：
* いずれも日本のものと同じ属であるが別種である。
** クランプ：担子菌類の隣接する細胞間の隔壁の部分にできる突起のこと。かすがい連結ともいう。クランプをつくらない種も多く，分類の手がかりにされる。下図の矢印はかさの表皮菌糸のクランプを示す。



Porpoloma sejunctum (Hora.k)

** アミロイド：胞子や菌糸の細胞壁または表面の突起などが，ヨード・ヨードカリ液で淡灰青～青紫～暗紫色に着色すること。着色しないかまたは淡黄色のとき非アミロイド，赤褐色になるとき偽アミロイドという。これらの呈色反応にはメルツァー試薬が使われる。
** シスチジア：担子菌類のきのこの表面，例えば傘，柄，ひだなどの表面にある特異な形の細胞をシスチジアという（単数形はシスチジウム）。円柱状，こん棒状，フラスコ状，徳利状など多種で，まわりの細胞に比べ目立つことが多い。縁シスチジアとはひだの稜線部にできるものをいう。

昭和62年度関西菌類談話会大会報告

（第252回例会）

と　き　　昭和63年2月6日（土）　14:00－17:10
ところ　　京都教育文化センター　2F　2号会議室

総　会（14:00－15:20）
開会挨拶　吉見昭一副会長
議長選出　副会長推薦により高山　栄会員を議長に選出
議　事
昭和62年度事業報告，会計報告，その他の報告
1. 総務報告　横山竜夫総務幹事より下記のとおり事務局報告があり，了承された。
(イ)昭和62年4月1日付けで会長委嘱により昭和62－63年度役員が決定した。また，吉見昭一氏が副会長に委嘱された。
(ロ)昭和62年5月1日付けで本郷次雄会長より辞任の申し出があり，同年6月13日の役員会で承認された。
(ハ)昭和62年6月13日（京都市），9月12日（京都市），11月21日（大阪市）に，それぞれ，役員会が行われた。

関西菌類談話会役員名簿
（昭和62年4月1日現在）

会　長	本郷　次雄	会務総括
副会長	吉見　昭一	会長補佐，会務代行
総務幹事	横山　竜夫	事務局担当（入会，入金等の受付）
庶務幹事	伊藤　忠義	集会事務担当，会員名簿管掌
	下野　義人	採集会事務担当，図書・備品管掌
会計幹事	丸本　龍二	出納事務（会計帳簿記録・管理）
	岩瀬多佳子	会費事務（会員別会費納入記録・請求）
運営幹事	山中　勝次	（集会運営総括責任者）
	横山　和正	（採集会運営総括責任者）
	井坪　豊明	
	岩瀬　剛二	
	熊田　俊夫	
	森本　繁雄	
	小原　弘之	
	志水　杏子	
	竹田冨久雄	
編集委員長	上田　俊穂	会報編集・発行
会計監査	森本　肇	
	田中　昭子	

任　期　昭和62年4月1日－昭和64年3月31日

2. 庶務報告(1)　下野義人庶務幹事より昭和62年度採集会について計画どおり実施されたことが報告され，了承された。
庶務報告(2)　山中勝次運営幹事より昭和62年度集会について下記のとおり実施されたことが報告され，了承された。
(イ)昭和62年5月24日（日）　分類学講座（第12回）「植物の病気とその見分け方」（第243回例会）　京都府立大学大学会館大ホール（2F）。講師は田中千尋氏で，参加者33名。午後は同大学付属農場内で採集。
(ロ)同11月21日（土）　シンポジウム　「食用きのこの栽培技術―現状と展望」（第250回例会）　大阪市立大学文化交流センター・ホール。参加者63名。演題と演者は下記のとおりであった。
(1)世界の食用きのこ消費と栽培の現状　　山中勝次氏（奈良林試）
(2)きのこ生産と環境制御―その基礎を考える　　鈴木彰氏（千葉大）
(3)きのこ成長とプロテアーゼ　　寺下隆夫氏（近畿大）
(4)食用きのこ栽培技術の新しい展望―バイオテクノロジー技術の利用　　岩瀬剛二氏（宝酒造中研）
(ハ)同12月13日（日）　スライド大会（第251回例会）　田中神社弘安殿。参加者42名。スライド提供者11名。
3. 会計報告(1)　丸本龍二会計幹事より昭和62年度収支決算について報告され，了承された。また，特別会計について繰越金が前年同額の10万円であることが報告され，了承された。

関西菌類談話会　昭和62年度会計決算報告
昭和63年2月6日

［収入］　単位：円

	予　算	決　算
繰越金	401,770	401,770
会　費	360,000	666,500
会場費	40,000	77,855
雑収入	50,000	295,210
別刷　要旨売上		〔 81,470〕
その他		〔213,740〕
収入合計	851,770	1,441,335

［支出］　単位：円

	予　算	決　算
通信費	220,000	203,010
事務費	30,000	29,026
会場費	50,000	45,200
会議費	10,000	33,490
印刷　コピー費	50,000	10,340
謝礼	40,000	80,000
会報印刷費	100,000	50,000
会報刊行諸経費	20,000	10,000
振替手数料	1,000	1,735
雑支出	20,000	93,800
予備費	20,000	0
事業準備金（定期貯金）	100,000	100,000
支出合計	661,000	656,601

［繰越］

次年度繰越金	190,770	784,734

会計幹事　岩瀬多佳子 ㊞
会計幹事　丸本　龍二 ㊞

関西菌類談話会　昭和62年度特別会計決算報告
昭和63年２月６日

故浜田稔博士記念出版事業寄付金
（同志社女子大学　小原幹事会計担当）

［収　入］	（前年度繰越金）	100,000
［支　出］		0
［差引残高］		100,000
次年度（昭和63年度）繰越金		100,000

運営幹事　小原　弘之 ㊞
会計幹事　岩瀬多佳子 ㊞
会計幹事　丸本　龍二 ㊞

会計報告(2)　同幹事（岩瀬多佳子会計幹事の代理）より会費納入状況について下記のとおり報告され，会費収入実績666,500円と一致することが示され，了承された。

昭和62年度会費納入状況（昭和62年12月31日現在）
単位：円

年度	S 60	S 61	S 62	S 63
金額	19,500	53,000	335,000	227,000
年度	S 64	賛助会費	合　計	
金額	7,000	25,000	666,500	

4. 会計監査報告　森本　肇会計監査より，昭和62年度収支決算報告が公正かつ明確で，誤りがまったくないことを，田中昭子会計監査とともに確認した旨報告され，昭和62年度収支決算が承認された。

関西菌類談話会　昭和62年度会計監査報告

会計幹事より提出された現金出納帳簿，会費納入原簿，諸経費支出に伴う領収書等の会計書類に基づき監査を行った結果，昭和62年度会計報告が正しいことを認めます。

昭和63年２月６日

会計監査　森本　　肇 ㊞
会計監査　田中　昭子 ㊞

5. 編集委員会報告　上田俊穂会報編集委員長より，「関西菌類談話会会報№２」が昭和62年11月14日に発行され，変形Ｂ５版，８ページ，500部を作成して同日会員に配布した旨報告され，了承された。印刷費は５万円。

昭和63年度事業計画，会計予算案，その他の審議

1. 事業計画

(イ)採集会　下野庶務幹事より昭和63年度採集会計画案について配布資料に基いて説明と提案があり，原案どおり承認された。なお，８月に予定の宿泊採集会（第257回例会）については候補地調査中で未定であり，後日決定して会員に通知するよう役員会に一任することが承認された。

(ロ)集会　山中運営幹事より昭和63年度計画案について配布資料に基いて説明と提案があり，分類学講座，シンポジウム，スライド大会，昭和63年度大会についての日程は原案どおり，具体的実施内容については役員会に一任することが，それぞれ，承認された。

(ハ)会報発行　上田編集委員長より昭和63年度の編集計画及び会報発行予定について説明と提案が行われ，年２回（４月，10月）発行とし，変形Ｂ５版，各８ページとすることが承認された。

2. 会計予算案　丸本会計幹事より昭和63年度会計予算案について配布資料に基いて説明と提案が行われ，原案どおり承認された。

関西菌類談話会　昭和63年度会計予算案
昭和63年２月６日

［収入］　単位：円

繰越金（１月１日現在	784,734
会費（@ 1,000×380）	380,000
会場費	40,000
雑収入	60,000
収入合計	1,264,734

［支出］　単位：円

通信費	210,000
事務費	30,000
会場費	50,000
印刷　コピー費	50,000
謝礼	60,000
会議費	30,000
会報印刷費	100,000
会報刊行諸経費	20,000
振替手数料	1,000
雑支出	20,000
予備費	20,000
事業準備金（定期貯金）	100,000
支出合計	691,000

［繰越］

次年度繰越金	573,734

会計幹事　岩瀬多佳子 ㊞
会計幹事　丸本　龍二 ㊞

3. その他　本会はきのこ同好会ではないのかとの質問があり，吉見副会長より本会会則に目的が示されているとおり，菌類の調査，研究などのために協力，交流するのが主目的で，そのために会員相互の親睦と菌類についての啓蒙を計っているので，その目的に沿い，会則にのっとった会の運営が円滑にできるよう，会員の一層の協力をお願いしたいとの発言があった。これに関連して，本会の目的，性格については，今後も検討する必要があるのではないか，との意見があった。

閉会挨拶　吉見副会長

講演会（15:30－17:10）

1. アメリカ北西部のきのこ　David R. Hosford 氏（Central Washington University, U.S.A.）
2. ニュージーランドおよびタスマニアのきのこ　本郷次雄氏（滋賀大学）

［事務局］

事務局より

1. 会員数について

昭和62年度入会者18名，退会者７名であり，昭和62年12月31日現在の会員数は通常会員423名，賛助会員２名で合計425名である。また，昭和63年２月６日現在，入会者３名を加えて428名となった。　（庶務幹事）

2. 会費未納者数

昭和62年12月31日現在の会費未納者数は下記のとおり。

未納年度	S 60～S 63	S 61～63	S 62，63	S 63
人　数	19	15	22	136

なお，本会会費は会則第15条により前納制で該当年度の前年の12月31日までに納入して頂くことになっております。また，

いて会費を3年間納入しない場合は退会したものと見なすことになっております。これにより，上記中19名は昭和62年度退会，15名は昭和63年度退会となりますので，該当の方は至急会費を納めて下さい。但し，会計事務処理が大変複雑になりますので，請求していない年度の前納（先払い）は絶対にしないで下さい。

（会計幹事）

3. 他団体からの寄贈会報等

北海道きのこの会「北海道きのこの会会報」No.14，No.15，「きのこの分類」，仙台キノコ同好会「仙台キノコ同好会会誌」第12号，日本冬虫夏草の会「冬虫夏草」No.6，No.7，日本菌学会東北支部会報「つちだんご」，苫小牧きのこの会「きのこカレンダー」，きのこ星雲「きのこ通信」

1988年関西菌類談話会行事予定

世話人氏名　敬称略・順不同

253回　5月14日（土）　分類学講座（第13回）
場所，演者未定
世話人：山中勝次，伊藤忠義，岩瀬剛二，熊田俊夫，下野義人，丸本龍二．
＊詳細は別紙にてお知らせします．

254回　6月11日（土）　シンポジューム
場所，演者未定
世話人：山中勝次，伊藤忠義，岩瀬剛二，熊田俊夫，下野義人，丸本龍二．
＊詳細は別紙にてお知らせします．

255回　7月10日（日）　長岡天満宮裏山採集会
長岡天満宮の階段の上集合（10:30）．シイ，カシ林
世話人：上田俊穂，高山　栄，竹田富久雄，橋屋　誠．

256回　7月31日（日）　伏見稲荷採集会
伏見稲荷大社参集殿前集合（10:30）．コジイ林．
世話人：森本繁雄，井坪豊明，吉見昭一．

257回　8月9日（火）－8月11日（木）
朝日の森採集会（2泊3日）
場所　朝日の森（滋賀県朽木村）．アカマツ，コナラ林
世話人：井坪豊明，森本繁雄，山中勝次，上田俊穂，丸西靖恵，服部　力，横山和正，大西裕司，衣田雅人，田中千尋
＊詳細は別紙にてお知らせします。

258回　9月25日（日）　鞍馬山採集会
鞍馬寺山門前集合（10:30）．モミ，ツガ林．
世話人：吉見昭一，橋屋　誠，森本繁雄，田中千尋．

259回　10月16日（日）　京大上賀茂試験地採集会
京都市北区上賀茂本山2　京都大学農学部付属演習林上賀茂試験地事務所前集合（10:30）．植栽したマツ林地．
世話人：加藤景生，相良直彦，菊池淳一，上田俊穂．

260回　11月6日（日）　三上山方面採集会
滋賀県野洲郡野洲町北桜
森林センター集合（10:30）．アカマツ林．
世話人：太田　明，橋屋　誠，横山和正，大西裕司．

261回　12月18日（日）　スライド大会
京都市左京区田中樋口町1　田中神社弘安殿（10:30－16:00）．
世話人：服部　力，井坪豊明，田中千尋，丸西一枝．岩瀬剛二，相良直彦，上田俊穂，大西裕司．
各自スライドをご用意下さい．

262回　2月4日（土）　総会及び講演会
場所，演題未定
世話人：山中勝次，伊藤忠義，岩瀬剛二，熊田俊夫，下野義人，丸本龍二．
＊詳細は12月頃にお知らせします．

関西菌類談話会会報投稿案内

1. 投稿は原則として本会会員に限ります。
2. 原稿の採否，掲載の順序は編集委員会の決定にお委せください。
3. 編集委員会は，著者に原稿中の字句，表，図，写真などのスタイルの統一や変更を求めることがあります。文章の用法上，あるいは文法上の誤り，その他の修正は編集委員会にお委せください。
4. 原稿には表題，著者名，本文の他に必要なら引用文献（あるいは参考文献）をあげてください。
5. 別紙に著者名，連絡先，住所，電話番号を書いて添付してください。
6. 著者校正は初校だけとし，2日以内に原稿正本とともに速達郵便で返送してください。
7. 掲載された原稿はお返ししませんが，図・写真に限り著者校正のときお返しします。
8. 写真製版料実費は著者の負担とします。
9. 原稿は会報編集委員長宛てにお送りください。

～皆様の投稿をお待ちしております～

- ◇ かびやきのこに関する記事，図，本誌に関するご意見などをお寄せください。
- ◇ 図は黒インクで，少し大き目（刷り上がりの約1.5倍）にお書きください。（ボールペンは不可です）
- ◇ 原稿の分量は400字づめ原稿用紙4～5枚程度としますが，1枚でも半分でも結構です。
- ◇ 写真の掲載を希望される方は，編集委員長におたずねください。
- ◇ 原稿宛て先

〒617　長岡京市西の京14－2
関西菌類談話会会報編集委員長
上　田　俊　穂
（TEL　075－955－2179）

編集委員：井坪　豊明，橋屋　　誠，森本　繁雄
扇　進次郎，上田　俊穂

関西菌類談話会会報　No. 3

1988年4月30日 印刷
1988年4月30日 発行

編　集　関西菌類談話会会報編集委員会
発　行　関西菌類談話会

発行所　関西菌類談話会
事務局　〒532　大阪市淀川区十三本町2－17－85
財団法人発酵研究所　真菌研究室内
電話　06－302－7281
振替　大阪5－83129
印刷所　橋　本　印　刷
〒600　京都市下京区松原通御前東入下ル